乾燥の土の中より、只一度に水を得事はかたかるべし、自又不能不忠の者もよきためしもあれども、それは前生の宿縁厚くこたへて有樣こそはあるらめ、打任せたる習ひとたのまん鵜のまねする烏に似たり、株を守る愚夫にことならず、

〔夫木和歌抄二十七烏〕同からす　權僧正公朝

おほゐがは井ぐひにきゐる山烏うのまねすともうをはとらじな

〔關八州古戰錄十七〕秀吉公湯本著陣事

氏政、氏直ハ、不器ニシテ徒ニ父祖ノ餘耀ニ誇リ、時機ヲ辨ヘズ、其敵ヲ考ヘズ、險ニ據リ衆ヲ賴テ、奇正虛實ノ作略ヲ忘レ、茫然トシテ如此ノ仕儀ニ及ビ、果シテ國家ヲ失ハレタルハ、悉皆諺ニ云フ、鵜ノ眞似スル烏ノ水ヲ呑テ死スルガ如シ、

〔世事百談〕俚諺

目かどをつけて人を見るを、諺にうの目たかの目にて、油斷のならぬなどいふことあり、この二鳥は目の疾きものゆゑに、たとへていへることゝのみおもひたるに、六俳園立路隨筆に、世の諺に、うの目たかの目といふことあり、〇略中硫黃にうの目たかの目といふありて、いづれも上品なり、是にておもへば、おとらざるにいひ侍るなるべし、

〔義經記二〕伊勢三郎義經の臣下に初て成事

男扱も〳〵わごせをば、志賀の都のふくろ心は東のおくのものにこそおもひつるに、色をも香をもしる人ぞ知と、仰られけることばのすゑをわきまへて、宿をかしぬるこそやさしけれ、

〔寶物集二〕田舍山寺ニ只暫居住シテ侍リシニ、勸學院ノ雀ハ蒙求ヲ囀リ、七金山ノ烏ノ黃ナル翅生タルランヤウニ、ヲロ〳〵承リシハ、諸行無常ヲ觀ズルヲ、佛法ノ大意トハ申ストコソ承リシカ、